

## 【報告】

# 集団宿泊活動における宿泊日数による教育的効果への影響に関する一考察 A Study on the impact of the educational effect of the stay in Group Lodging Activities

長谷川 祐太 HASEGAWA Yuta

国立青少年教育振興機構

## 要旨

平成 20 年の学習指導要領の改訂に伴い、長期集団宿泊活動(5 日間程度)が推奨されたが、平成 25 年度における 4 泊 5 日での集団宿泊活動の実施件数は低水準であり、1 泊 2 日での集団宿泊活動の実施が過半数を超えている。こうした背景の一つには、1 泊 2 日や 2 泊 3 日での教育的効果の検証がなされずに、研究の中心が 3 泊 4 日以上での集団宿泊活動への教育的効果や負担についてなされていることが考えられる。

そこで本研究では 1 泊 2 日と 2 泊 3 日での集団宿泊活動に着目し、その教育的効果の差を検証した。その結果、1 泊 2 日での実施から 2 泊 3 日での実施に 1 泊伸びることで子供たちに与える教育的効果があることが明らかになった。しかし、一方では現状を脱却できずに不安を抱えている学校現場があることも浮き彫りになった。教育的効果を明らかにしていくとともに、不安事項を解消しながら、泊数を少しずつ伸ばす環境を整えていくことが、長期集団宿泊活動を推進するための方策である。

## キーワード

国立青少年教育施設、集団宿泊活動、教育的効果

## I. 諸言

平成 20 年 3 月に「小学校学習指導要領」(以下、「学習指導要領」という)が告示された。学習指導要領の改訂にあたり、中央教育審議会が教育課程及び指導・改善の方策を検討され「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」(平成 20 年 1 月)が答申された。

この答申では、「生きる力」の育成という教育理念の継承とともに、教育内容に関する主な改善事項として、「体験活動の充実」が提示され、「子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むため、その発達段階に応じ、集団宿泊活動(小学校)(略)を重点的に推進する」と提言している。

この提言を受け、学習指導要領では、「集団宿泊体験、ボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」と明記され、また、「小学校学習指導要領解説 特別活動編」には、「一定期間(たとえば 1 週間(5 日間)程度)にわたって行うことが望まれる」と長期集団宿泊活動が推奨されている<sup>1)</sup>。

しかし、学習指導要領が告示され 5 年経過した平成 25 年度全国学力・学習状況調査によ

れば、4泊5日以上 of 宿泊体験活動を実施している学校は5.1%、3泊4日が2.5%、2泊3日が31.3%、1泊2日が54.6%、実施無しが6.4%となっており、低い水準となっている<sup>2)</sup>。

国立青少年教育振興機構は、H24年4月からH25年2月に、全国の国立青少年教育施設(27施設)を利用した小学校を対象として、「集団宿泊活動」に関するアンケート調査(以下、「全国調査」という。)を実施した。全国調査の目的は、学校の集団宿泊活動(自然教室や林間学校等)を充実させるための取り組みを進める上で、参考となる基礎的な情報を得ることを目的に、集団宿泊活動の実態や課題、教員の意識等に関する全国的な調査である。全国調査では、施設を利用した約1400の学校へアンケートをし、利用に関して様々な質問を行った。また、長期的な集団宿泊活動の効果を測定するための検証を行っており、その効果について報告している<sup>3)</sup>が、3泊4日を境に長期集団宿泊活動との比較のみとなっており、最もサンプルの多い1泊2日での利用が46.9%(約600件)と2泊3日での利用が46.6%(約600件)の差については検証がなされていない。しかし、1泊2日と2泊3日では、施設での活動時間が異なってくるため、活動できる内容の幅が異なり、参加児童へ与える影響にも差が出ると考えられる。

集団宿泊活動が長期の活動になるにつれて教育的効果が高いことは、国立青少年教育振興機構<sup>4)</sup>をはじめ様々な先行研究で知見が示されている。しかしながら、実態としては先にも述べたとおり、多くの学校が1週間程度の集団宿泊活動が実施できていない現状がある。また、3泊4日以上 of 集団宿泊活動への教育的効果や負担についての研究は多数あるものの、1泊2日と2泊3日の間での教育的効果や負担についての研究についてはなされていない。1泊2日での実施については、前述のとおり平成25年度の全国学力・学習状況調査によれば、全体の54.6%であり、過半数を超えている。とにかく1泊のみという学校が多いのである。たしかに、いきなり長期というのは学校にとっても保護者にとっても負担が大きくなるような印象を与えてしまう可能性がある。学校にはスモールステップ<sup>5)</sup>を踏んでもらい、徐々に集団宿泊活動の実施日数を伸ばしていってほしいと考える。そのためにも、まずは2泊3日の教育的効果についての理解をしてもらうことや、1泊増えることの不安や負担を取り除いていく必要がある。まずは「集団宿泊活動2泊3日での実施学校を増やす」ことではじめて、3泊4日、4泊5日と実施日数を増やしていく下地ができると考える。

そこで本研究は、全国調査における1泊2日と2泊3日での集団宿泊活動に着目し、その教育的効果の差を検証する。2泊3日での活動が、1泊2日での活動と比べてどのような点で効果的に働きかけるのか、活動の内容にも焦点をあてながら検証する。また、1泊2日利用の学校が2泊3日での利用ができない理由についても考察し、2泊3日での実施へつながるような、対応策についても検討する。本研究によって、1泊2日での集団宿泊活動を実施している学校が、少しでも多く2泊3日での活動を実施し、より子供たちに教育的な効果を与える活動を実施できるようになる環境づくりの一助としたい。

## II. 方法

### 1. 先行研究について

本研究は、国立青少年教育振興機構が平成24年4月から平成25年2月の間に実施した

前述の全国調査のデータを用いている。対象校は 2,069 校であり、回答した学校は 1,419 校（回収率 68.6%）である。回答者は実施した学年の主任とするが、①複数学年で実施した場合は、より長い期間で行った学年とし、期間が同じ場合は、より上の学年が回答する、②複数の学校で実施した場合は、代表の学校が回答する、③1年間で複数回実施した場合は、より長い期間で行った集団宿泊活動を対象に回答する、とした。

## 2. 調査方法

本調査では、Ⅱ-1 で回収されたデータの内、1泊2日および2泊3日での宿泊活動を実施した団体のみ抽出し、取り扱う。データ処理については該当項目に不備がない1泊2日および2泊3日での利用団体の計1,258校を対象とした。対象の属性については以下図1～3のとおりである。

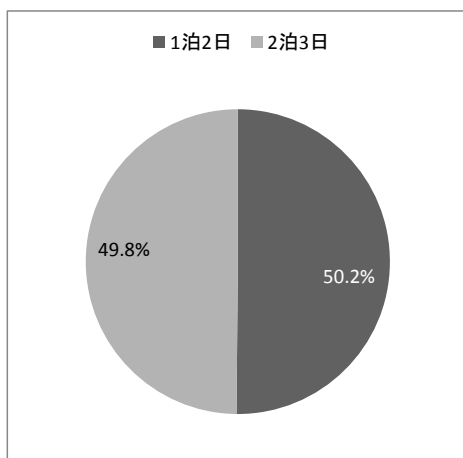


図1 実施日数

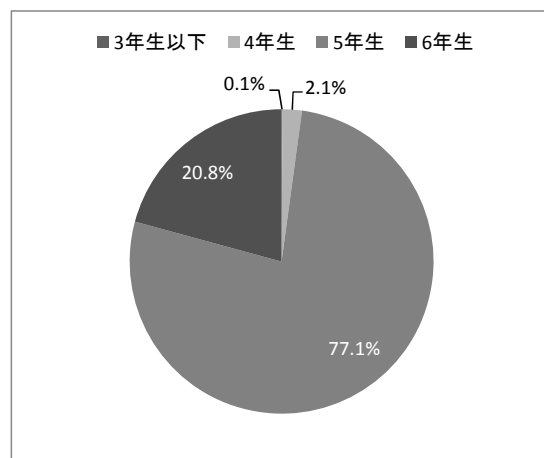


図2 実施学年

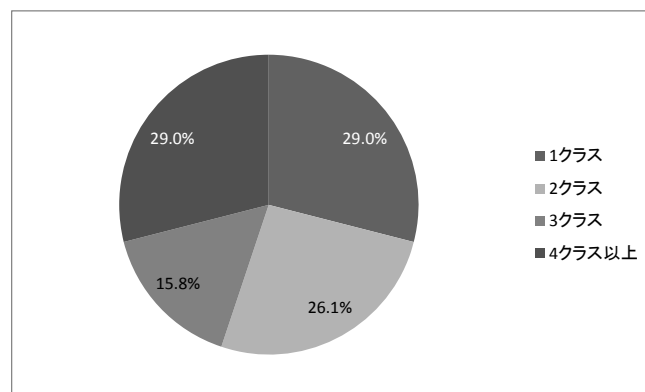


図3 実施時のクラス数

## 3. 分析方法

全国調査の結果について、集団宿泊活動を1泊2日と2泊3日で実施している学校と従属変数とのクロス集計を用いて「教育的効果」「取り入れたい活動」「集団宿泊活動を実施する際の不安」「外部の指導者の協力を得たい事柄について」「適当な日数について」を比較した。

なお、統計処理及び統計的有意差の検定には、IBM SPSS Statistics22.0 for Windows を用いて Pearson の  $\chi^2$  検定を実施、5 %未満を有意水準とし、10%未満を有意傾向とした。

### III. 結果

#### 1. 教育的効果について

泊数と教育的効果についてクロス集計を行ったものが表1である。「少し思う」「とても思う」を足した値において、「早寝早起きなど、規則正しい生活を送るようになった」「諦めずに粘り強く取り組むようになった」「学級で発生した問題を、自分たちで話し合うなどして解決するようになった」「マナーやルールを守るようになった」「進んで係活動や清掃に取り組むようになった」という点で2泊3日の方が効果があったとしている。一方で「共通の目標に向かって努力するようになり仲間意識が向上した」という項目に関しては1泊2日の方が効果があったと思うと答えた割合が高くなっている。しかし、とても思うという回答のみに着目すると2泊3日の方が高いため、効果的に発揮されたと感じる学校とそうではない学校で2極化してしまっているようである。

表1 泊数×教育的効果について

	1泊2日			2泊3日		
	思う			思う		
	少し思う	とても思う		少し思う	とても思う	
自分に自信を持つことや自分が学級に役立っていると思うなど、自己を肯定的にとらえるようになった	69.3%	23.5%	<	71.6%	22.3%	
	92.7%			93.9%		
自ら考え行動するようになった	69.7%	22.7%	<	68.7%	24.2%	
	92.4%			93.0%		
進んで学習に取り組むようになった	60.9%	5.4%	>	61.1%	4.0%	
	66.2%			65.1%		
早寝早起きなど、規則正しい生活を送るようになった	51.5%	4.9%	<	55.8%	6.5%	+
	56.4%			62.4%		
諦めずに粘り強く取り組むようになった	65.1%	12.7%	<	67.5%	15.3%	*
	77.8%			82.8%		
共通の目標に向かって協力するようになり仲間意識が向上した	47.5%	51.2%	>	39.1%	58.4%	**
	98.7%			97.4%		
相手の言うことをよく聞き、理解し合い、相手のことを思いやるようになった	71.5%	17.3%	<	71.0%	18.0%	
	88.7%			89.0%		
今まで交友関係がなかった児童同士に新しい交友関係が芽生えるなど、よりよい人間関係が育まれた	59.0%	29.8%	<	58.7%	33.0%	
	88.7%			91.7%		
学級で発生した問題を、自分達で話し合うなどして解決しようとするようになった	61.0%	8.6%	<	65.1%	10.8%	*
	69.6%			75.9%		
自然に親しみを感じるようになった	59.1%	31.4%	<	59.5%	31.4%	
	90.5%			90.9%		
自然への関心や環境保全に対する意識が向上した	63.1%	20.3%	<	65.7%	21.1%	
	83.4%			86.8%		
マナーやルールを守るようになった	68.1%	18.7%	<	71.8%	16.9%	+
	86.8%			88.7%		
進んで係活動や清掃に取り組むようになった	65.5%	17.1%	<	70.0%	12.9%	*
	82.6%			82.9%		
責任のある行動がとれるようになった	70.8%	16.6%	>	69.5%	17.1%	
	87.5%			86.6%		

\*\* $P \leq 0.01$ , \* $0.01 < P \leq 0.5$ , + $0.5 < P$

#### 2. 取り入れた活動について

III-1と同様に泊数と取り入れた活動についてクロス集計を行ったものが表2である。表2の結果をみると、2泊3日の学校の方が「児童が話し合っってプログラムなどを決める活動」「児童が協力しないとできないような課題性を持たせた活動」と取り入れたとしている。1泊の違いは、丸一日分の活動時間に差がでるため、話し合いや課題解決といった時間のかかる活動が組み込みやすくなると考えられる。

表2 泊数×取り入れた活動について

	1泊2日			2泊3日		
	取り入れた			取り入れた		
	ある程度	十分		ある程度	十分	
児童が話し合ってプログラムなどを決める活動	13.5%	38.2%	<	15.0%	42.7%	+
	51.7%			57.7%		
児童一人一人に役割を持たせ、それを果たす活動	66.4%	29.8%	<	66.2%	31.4%	
	96.2%			97.6%		
児童が協力しないとできないような課題性を持たせた活動	52.6%	39.1%	<	44.7%	47.8%	*
	91.8%			92.5%		
児童が問題を解決するような話し合いの活動	18.1%	52.3%	<	18.5%	53.4%	
	70.4%			71.9%		
活動をふりかえり話し合ったり、まとめたりする活動	38.0%	48.7%	<	43.4%	46.7%	
	86.7%			90.1%		
活動を通して気付いたり、学んだりしたことを発表する活動	25.2%	49.3%	<	24.4%	53.7%	
	74.5%			78.1%		

\*\* $P \leq 0.01$ , \* $0.01 < P \leq 0.5$ , + $0.5 < P$ 

表3 泊数×取り入れたい活動について

	1泊2日			2泊3日		
	思う			思う		
	少し思う	とても思う		少し思う	とても思う	
登山やオリエンテーリングなどの野外活動	22.0%	77.3%	>	17.2%	81.2%	*
	99.4%			98.4%		
カッターやカヌーなどの水辺の活動	33.9%	44.2%	=	42.3%	35.9%	**
	78.1%			78.1%		
野鳥観察や植物観察などの自然とふれあう活動	46.8%	43.3%	<	51.7%	40.5%	
	90.0%			92.2%		
野外で調理を行う活動(野外炊事)	26.1%	67.5%	<	21.2%	75.3%	*
	93.7%			96.5%		
ネイチャークラフトや焼き板などの創作活動	54.8%	21.7%	<	53.3%	27.3%	+
	76.5%			80.5%		
わらじ作りや竹かご作りなどの生活文化活動	51.8%	16.2%	<	55.7%	14.7%	
	68.0%			70.3%		
農業・林業・漁業などの作業体験	43.1%	28.8%	<	45.9%	26.5%	
	71.9%			72.4%		
農家・林業家・漁家に泊まる民泊体験	33.8%	22.2%	<	37.3%	18.7%	**
	55.9%			56.0%		
キャンプファイヤーやキャンドルのつどいなどの夜の活動	31.4%	60.7%	<	22.8%	73.7%	**
	92.1%			96.5%		
スポーツやレクリエーションなどの活動	45.3%	33.9%	<	43.5%	36.7%	
	79.2%			80.2%		
工場の見学や作業体験などの勤労体験	37.6%	17.9%	<	41.6%	15.2%	
	55.5%			56.8%		
名所や旧跡などの見学	36.3%	12.8%	<	40.2%	13.6%	
	49.1%			53.7%		

\*\* $P \leq 0.01$ , \* $0.01 < P \leq 0.5$ , + $0.5 < P$ 

## 3. 取り入れたい活動について

取り入れた活動の他に取り入れたい活動についても泊数とのクロス集計で比較したものが表3である。「登山やオリエンテーリングなどの野外活動」については1泊2日利用の学校が取り入れたいと思っていることがわかる。また「カッターやカヌーなどの水辺の活動」

については「少し思う」「とても思う」を足した値は同じだが、「とても思う」のみ着目すると1泊2日利用の値が高い。これらの海活動・山活動は施設の立地によって左右されるため、可能な施設と不可能な施設があるが、基本的には目玉活動になっている場合が多い。一方で、「野外で調理を行う活動(野外炊事)」「ネイチャークラフトや焼板などの創作活動」「キャンプファイヤーやキャンドルのつどいなどの夜の活動」については2泊3日の方が取り入れたいと思っていることがわかる。これらの活動は、比較的どの施設でも実施することが可能である。また、特別な活動として「農家・林業家・魚家などに泊まる民泊体験」も挙げられている。施設と民泊の両方を行う場合は2泊以上が必要になるためと考えられる。

#### 4. 集団宿泊活動を実施する際の不安

集団宿泊活動を実施するうえでの不安事項についてもクロス集計を行ったものが表4である。実施する際の不安要素については、「先生ご自身の身体的な健康」「保護者の経済的な負担」の2項目において2泊のほうが不安と有意に回答している。これは1泊2日の実施よりも2泊3日で不安に思いうすい内容として挙げられる。泊数が増えることに伴い、教員が子供と活動する時間も長くなってくる。学校と異なる環境であることは、教員にとっても身体的不安を抱える原因となると考えられる。また、保護者の経済的な負担についても、日数が増加に伴い、お金がかかる活動が増えるのではないかという不安を抱えると考ええる。

表4 泊数×集団宿泊活動を実施する際の不安

	1泊2日			2泊3日		
	不安			不安		
	少し不安	とても不安		少し不安	とても不安	
児童の身体的な健康(病気や体調不良)	47.9%	39.0%	<	48.4%	39.5%	
	86.8%			87.9%		
児童の精神的な不安(参加不安やホームシック)	48.3%	13.8%	>	48.4%	12.5%	
	62.1%			60.9%		
児童の野外活動等における事故	43.2%	47.6%	<	43.4%	49.1%	
	90.8%			92.5%		
児童の生活上の指導	44.5%	6.8%	>	45.2%	6.1%	
	51.4%			51.3%		
集団宿泊活動を実施することによる授業時間数の不足	23.6%	6.0%	<	24.1%	5.8%	
	29.6%			29.9%		
集団宿泊活動の教育効果があいまい	12.5%	1.1%	<	14.1%	1.1%	
	13.6%			15.2%		
集団宿泊活動の事前準備の時間の確保	44.2%	12.7%	<	48.2%	9.9%	
	56.9%			58.1%		
先生ご自身の体験活動の指導力	39.7%	7.3%	>	38.3%	7.3%	
	47.1%			45.7%		
先生ご自身の身体的な健康	15.9%	3.7%	<	24.1%	3.8%	**
	19.5%			28.0%		
時間外勤務に対する十分な補償	22.4%	7.0%	<	22.0%	7.5%	
	29.4%			29.6%		
保護者の経済的な負担	29.1%	3.8%	<	33.9%	3.8%	+
	33.0%			37.8%		
保護者の理解を得ること	13.0%	1.9%	<	16.2%	1.8%	
	14.9%			18.0%		

\*\* $P \leq 0.01$ , \* $0.01 < P \leq 0.5$ , + $0.5 < P$

## 5. 外部の指導者の協力を得たい事柄について

表5は、外部指導者に協力を得たいと思っている事柄と泊数のクロス集計である。この結果については「野外炊事や登山などの活動プログラムの指導」「集団宿泊活動の評価への助言」「児童への生活指導の補助」の項目において1泊2日で実施している学校が協力を得たいと思っていることがわかる。

表5 泊数×外部の指導者の協力を得たい事柄について

	1泊2日			2泊3日		
	思う			思う		
	少し思う	とても思う		少し思う	とても思う	
集団宿泊活動の計画立案への助言	39.7%	19.0%	>	38.7%	15.7%	
	58.7%			54.3%		
現地での活動や指導者の手配などのコーディネート的なこと	47.3%	34.4%	<	42.8%	39.6%	
	81.7%			82.4%		
野外炊事や登山など活動プログラムの指導	42.4%	43.8%	>	43.8%	40.3%	+
	86.2%			84.2%		
集団宿泊活動の評価への助言	35.4%	9.0%	>	31.4%	7.0%	+
	44.4%			38.4%		
児童への生活指導	24.9%	4.4%	>	25.1%	2.4%	
	29.4%			27.5%		
野外炊事や登山など活動プログラムの指導補助	45.9%	42.0%	>	45.5%	38.7%	
	87.9%			84.2%		
児童への生活指導の補助	30.8%	5.4%	>	25.2%	4.2%	+
	36.2%			29.4%		

\*\* $P \leq 0.01$ , \* $0.01 < P \leq 0.5$ , + $0.5 < P$

## 6. 適当な日数について

最後に、現在実施している泊数と適当だと思う集団宿泊活動の日数についてのクロス集計を示す。1泊2日利用、2泊3日利用共に、概ね今現在実施している泊数が適当な日数だと思っていることがわかる。多くの学校団体は、前年度踏襲、現状維持が多いことが表6から見てくる。しかし、現在1泊2日利用している学校の中には、1泊2日が適当と考えている学校は58.8%であり、それ以外の1泊2日実施の学校は2泊3日以上の利用を適当だと考えていることが予想される。こうした学校については、実施泊数と泊数を延長したいが実現できないギャップが存在していると言えるだろう。

表6 泊数×適当な宿泊日数

	1泊2日	2泊3日	**
1泊2日	58.8%	7.3%	
2泊3日	35.7%	85.3%	
3泊4日	3.5%	5.6%	
4泊5日	1.1%	1.3%	
5泊6日	0.6%	0.2%	
6泊7日以上	0.3%	0.3%	

\*\* $P \leq 0.01$ , \* $0.01 < P \leq 0.5$ , + $0.5 < P$

#### IV. 考察

集団宿泊活動を実施する上での1泊2日と2泊3日の間には、いくつかの教育的効果の差が見られたが、これらは大きく2種類に分けられる。

「早寝早起きなど、規則正しい生活を送るようになった」「マナーやルールを守るようになった」「進んで係活動や清掃に取り組むようになった」のような項目は、主に個人の成長に関わる項目である。青少年教育施設では「生活標準時間」が決まっており、起床や就寝の際には放送が流れる。また、食事の時間や入浴の時間も、施設によって若干の幅はあるものの、設定されている。生活標準時間に合わせて行動する機会が多いということは、規則正しい時間を意識させている点で影響を与えている可能性が考えられる。また、同級生や他団体との寝食を共にする共同生活は何かと不便なこともある。自分だけのスペースはなく、あくまで共有スペースしかないからである。整理整頓や清掃などの場所を使用する上でのルールが決まっており、子供たちには生活マナーを意識してもらう必要があるからだ。いつもの学校や家庭とは異なる非日常体験の中に少しでも長い時間身を置くことが個人の成長に関わっていると考えられる。そのため、集団宿泊活動における1泊2日と2泊3日では、丸一日活動できる時間が異なるため、1泊の差は大きいと言えるだろう。

一方で、「諦めずに粘り強く取り組むようになった」「学級で発生した問題を、自分たちで話し合うなどして解決するようになった」といった項目は、班やクラスに関わるため、個人というよりは、全体での成長である。これには取り組んだ活動内容が関わってくる。

Ⅲ-2では、取り入れた活動の内容について触れたが、2泊3日が1泊2日よりも有意に多く取り入れた活動は「児童が話し合っテプログラムなどを決める活動」「児童が協力しないとできないような課題性を持たせた活動」である。話し合う活動や協力する活動を集団宿泊活動に取り入れることは当然ながら、時間を確保しないとできない活動であり、1泊2日の中での実施は難しい。集団宿泊活動中に一方的に指導を受けた活動を実施するだけでなく、自分たちで考えることをしたり、役割を与えられる機会を提供することが教育的効果につながるのである。

さらにⅢ-3で取り入れたい活動項目をとりあげたが、2泊3日の学校については「野外で調理を行う活動(野外炊事)」「キャンプファイヤーやキャンドルのつどいなどの夜の活動」を取り入れたいとしている。この2つの活動に共通しているのは、事前の準備が必要な点と、集団でないと活動できない点である。野外炊事については、班での協力が不可欠となり、事前の学習をしている学校も多い。また、味というわかりやすい結果になるため、反省にもむすびつきやすい。また、キャンプファイヤーやキャンドルのつどいも多くの学校で取り入れている活動だが、これらの多くも事前に学校で準備をしてくる場合が多い。例えば、スタンツと呼ばれる歌や踊りの出し物であったり、レクリエーションである。集団での協力が結果になって現れる体験が集団の力を高めることは十分に考えられる。その他「農家・林業家・魚家などに泊まる民泊体験」については、宿泊と体験活動が抱き合わされた活動である。集団宿泊活動の中で、施設泊に加えて組み込む場合、2泊以上が必須となる。民泊体験での教育的効果については文部科学省が平成22年に報告<sup>6)7)</sup>しており、報告によれば、「マナー・モラル・心の成長」「学習意欲等」「食育」について一定の効果があつたとしている。一方で、「登山やオリエンテーリングなどの野外活動」「カッターやカヌーなどの水辺の活動」については、1泊2日利用の学校が取り入れたいと考えているが、



これらの活動は、体力的な面にも関わってくるため、集団での活動というよりも個人での頑張りが必要になる活動である。1泊2日の学校については、どちらかというと個人重視の活動を中心に取り組んでいると言えるだろう。

## V. 結論

では、1泊2日利用の学校を2泊3日利用にするためにはどうすればいいのだろうか。Ⅲ-6のように、1泊2日利用の学校の内、58.8%の学校で現在の1泊2日が適当な日数であると考えている。しかし、その他の学校については2泊3日以上宿泊活動が適当だと捉えていることが予想される。まず現状1泊2日が適当だと考えている学校に対しては、2泊3日での実施をした場合、「早寝早起きなど、規則正しい生活を送るようになった」「諦めずに粘り強く取り組むようになった」「学級で発生した問題を、自分たちで話し合うなどして解決するようになった」「マナーやルールを守るようになった」「進んで係活動や清掃に取り組むようになった」といった教育的効果があると伝えていく必要がある。また、教育的効果と合わせて、Ⅲ-4で述べているような不安材料を取り除いていく必要がある。Ⅲ-5での1泊2日利用が求めている「野外炊事や登山などの活動プログラムの指導」「児童への生活指導の補助」についても、裏を返せば専門家に頼りたい項目は不安事項である。このような不安が、2泊3日での実施を妨げている可能性もある。対策としては、不安事項を排除するために事前に不安を1つずつ解消していく丁寧な打ち合わせをしておくことや、当日についても適切な助言を学校へ提供することをあらかじめ学校へ伝えておくことで、2泊3日での実施に安心感と期待を持ってもらうことを働きかけたい。急な変化を求めるのではなく、施設を利用している学校への事前の聞き取りを綿密にすることで、抱えている不安や不明な点を少しずつ解消していくことが、利用の泊数を伸ばすために一番必要なことである。そして、泊数が伸びたことにより、子供たちの成長を感じることで、学校にとっては負担増を感じるよりも教員にとっても学びがあったなどの声が増えてくることで、泊数が伸びていく環境を整えていくことが、泊数を増やすための方策であると考えられる。

## VI. 今後の展望

今回の調査では、表7にあるようにサンプルに県ごとの偏りがある。国立青少年教育施設の利用学校へ郵送での調査を行ったため、返信のあった団体は施設の所在地の近隣学校が多くなったためである。しかし、日本全体を捉えた泊数の教育的効果の差異を調査することを考えた場合、国立のみならず、公立私立も検討に入れたうえで、さらなる精査が必要である。また、学校教員を対象とした調査のため、教員が考える子供への教育的効果と子供への実際の影響に乖離がみられる可能性がある。子供へ類似の調査を行い、教員の考えている効果との差を明らかにすることで、より1泊2日から2泊3日での集団宿泊活動を推進するための方策を明らかにできると考える。

本研究によって、1泊2日での集団宿泊活動を実施している学校が、まずは少しでも多く2泊3日での活動を実施し、3泊、4泊と泊数を伸ばし、より子供たちに教育的な効果を与える活動を実施できるように近づけていきたい。

表 7 全国調査の県別回収率

No	都道府県	回収数	回収率	No	都道府県	回収数	回収率
1	北海道	22	1.60%	23	滋賀県	12	0.80%
2	岩手県	27	1.90%	24	京都府	16	1.10%
3	宮城県	132	9.30%	25	大阪府	15	1.10%
4	山形県	3	0.20%	26	兵庫県	32	2.30%
5	福島県	169	11.90%	27	奈良県	62	4.40%
6	茨城県	3	0.20%	28	鳥取県	1	0.10%
7	栃木県	14	1.00%	29	島根県	8	0.60%
8	群馬県	32	2.30%	30	岡山県	42	3.00%
9	埼玉県	19	1.30%	31	広島県	49	3.50%
10	千葉県	48	3.40%	32	山口県	72	5.10%
11	東京都	33	2.30%	33	徳島県	3	0.20%
12	神奈川県	10	0.70%	34	香川県	2	0.10%
13	新潟県	111	7.80%	35	愛媛県	35	2.50%
14	富山県	98	6.90%	36	高知県	25	1.80%
15	石川県	20	1.40%	37	福岡県	109	7.70%
16	福井県	20	1.40%	38	佐賀県	13	0.90%
17	山梨県	3	0.20%	39	長崎県	58	4.10%
18	長野県	5	0.40%	40	熊本県	2	0.10%
19	岐阜県	21	1.50%	41	宮崎県	2	0.10%
20	静岡県	15	1.10%	42	鹿児島県	30	2.10%
21	愛知県	10	0.70%	43	沖縄県	2	0.10%
22	三重県	12	0.80%	44	不明	2	0.10%
計		1,419	100%				

※回収率は、全体回収数における各都道府県の回収数で算出

## 引用文献、参考文献、注

- 1) 国立青少年教育振興機構『学校で自然体験活動をすすめるために - 自然体験活動指導者養成講習会テキスト - 』2010
- 2) 文部科学省・国立教育政策研究所『平成 25 年度全国学力・学習状況調査報告書』2013
- 3) 国立青少年教育振興機構『学校教育における「集団宿泊活動」の手引き-各教科等の関連を図る教育課程編成指導資料-』、2014
- 4) 国立青少年教育振興機構『子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書』2010
- 5) スモールステップ（法）は、最初から高い目標を掲げるのではなく、目標を細分化し、小さな目標を達成する体験を積み重ねながら、最終目標に近づいていく手法
- 6) 文部科学省『農山漁村での宿泊体験による教育的効果の評価結果について』2009
- 7) 文部科学省『農山漁村での宿泊体験による教育的効果の評価について』2010